

# 後輩たちへのエール！ その51

2022年3月2日

## 面接試験で最もつまらない回答とは？『他の誰でもない自分』はどう作る？

◇今回は、静岡大学教授 石原 進さん からのメッセージです！

関高生のみなさんはじめまして。1990年の春に関高を卒業しました石原進です。

私は今静岡大学工学部数理システム工学科の教授をしています。専門はコンピュータネットワークです。特に無線のネットワークを扱っていきまして、自動車どうしのネットワーク（いわゆるコネクテッドカーとかV2Xと呼ばれるもの）、災害時の避難支援や復旧支援のための情報配信、さらには下水管の検査を無線通信機能付きのカメラカプセルを流して行うシステムの研究開発に取り組んでいます。大学の授業では、コンピュータネットワークやコンピュータアーキテクチャ、さらにコンピュータネットワークを使ったシステムの開発を行う実習などを担当しています。いわゆるIT業界そのものに関わる研究と教育をしています。

大学教授の私が高校生の皆さんにメッセージを書くと、高校生の皆さんがきっと沢山みている大学の紹介になってしまいそうで、書きづらいところがあるのですが、ここでは、大学や大学院の面接と大学生・大学院生の就職をサポートしている中で感じていることを紹介したいと思います。また、私が大学の教員にどのようなになって、どんなことをしているのかについても紹介します。



### ■入試や就職サポートで感じていること

大学入試での面接や就職の面接で頻出の質問「大学を卒業したらどのような進路を考えていますか？」「当社に入社したらどんな活動をしたいと思いますか？」に対する最もつまらない回答を知っていますか？「大学で学んだ知識を活かせる仕事をしたいと思います。」大学入試、大学院入試、就職の面接練習で驚くほど登場します。あまりに聞きすぎて、面接室のドアに、「『大学で学んだ知識を活かせる仕事をしたいと思います』と言っ

た人は不合格にします」と何度も書きたいと思ったくらいです。どこかのマニュアルに書いてあるのでしょうか。どんな人だろうと、それまで学んだことを生かして次のステップに生かそうとしますから、そんなことは聞かなくてもわかるのです。本当に知りたいのは、その人が具体的に何をしたいか、そこにその人の思いや考え方が感じられるかなのです。面接の時に、合格させたい、採用したいと思える人は、その人しか知らない、その人だけの話を持っています。小学生の時に親の仕事でアフリカで育って毎日サバンナを走って学校に通っていたとか、特別な体験をする必要はありません。日常の生活の中でも、あなたにしかない体験や、思いはあるはずなのです。面接では自分だけの体験や思いを熱く語る素晴らしい学生にももちろん巡り会います。とても強い言葉の力を感じます。もちろん高い確率で合格です。

自分だけの世界を作るものはなにか？とても簡単なのは本を読むこと。そして自分の趣味を楽しむこと。私の座右の銘は、「本と趣味には金をけちるな」です。中学校の卒業時に担任の先生からもらった言葉です。同じ教室の皆が同じ教科書を読みますが、自分で買う本はきっと他の人とは違うでしょう。そしてその本には日常ではとても体験できないことがきつと書いてあるはず（私が最近読んだある本では、作者は大陸をまたがった大規模なハッキングの犯人を追っていましたし、また別の本では作者は崩壊前のロシアで諜報活動をしていました。）あなたの趣味が他の誰かと全く同じことはないはず。音楽鑑賞が趣味と言ってもジャンルや好きなミュージシャンも曲もきつと違うはず。お金をケチって、自分が体験するだけでは得られない知識の吸収や、自分が興味のあることを思いっきり楽しむということをしていないと、他人とは違う自分の世界の広がりがなくなり、つまらない大人になってしまいます。自分の人生は他の誰でもない自分のもの。自分の世界を作りましょう！



## ■私はどのようにして大学教員になったのか

私自身の話をしたいと思います。私はどうやって大学の教員になったのか。

### - 大学院まで

私は小学生の時にピアノを習っていて、その後中3でエレキギターを始め、高校の文化

祭ではバンド演奏をしたり、文化祭のテーマソングに応募したりと（この企画、今もあるのでしょうか？）、音楽が好きで、ゆくゆくは電子楽器関連の機器開発がしたいと思っていました。それに加え、小学校から電機店に入り浸って、店頭のパソコンにプログラムを打ち込んで遊んだり、父が中古で手に入れてきてくれたNECの最初のパソコン（PC-8001）を使ってプログラミングをするなど、コンピュータに親しんでいました。そういうわけで、電子工学科に進学するのは私にとって自然な成り行きでした。

地元と言うこともありましたが、音声工学で著名な先生（板倉文忠先生）がいらっしゃる名古屋大学を目指しました。名大進学後、学部時代はバンドサークルでの活動に明け暮れて、あまり出来の良い学生ではなかったのですが、3年生の後期になってこれではマズいと感じ、真面目に勉強するようになりました。その頃、マイクロソフトの創業者ビル・ゲイツの伝記を読んだり、NHKの「電子立国ニッポンの自叙伝」という日本の半導体産業の隆盛まで（当時の日本の半導体はかなり良かったのです）を扱った番組と本に触れて、コンピュータに対する興味を強めていました。そういうわけで、当時の電子技術総合研究所（電総研）から移ってきたコンピュータアーキテクチャを専門とする島田俊夫先生の研究室で卒業研究を始めました。コンピュータをやりたかったことありますが、板倉先生が怖くて厳しいと聞いていたというのもありまして、当初目指していた板倉先生の研究室に行くのはやめにしてしまいました。その後、嶋田先生の研究室で修士課程進学を目指していたのですが、残念ながら大学院入試の成績で同研究室からははじき出されてしまいました。そこで、他にコンピュータのことを研究できそうな研究室として、情報処理教育センター付の教員だった岡田稔先生の研究室に行きました。配属当時、岡田先生から、「俺の本職は画像処理、ネットワークは業務、画像処理とネットワークとどっちがやりたい。」と聞かれたので、迷わず、コンピュータネットワークを選びました。当時はインターネットの公衆利用が始まった頃で、少しずつWorld Wide Web（いわゆるWeb）が一般の人にも知られるようになって行き始めた頃でした。「これからは絶対にネットワークの時代だ」と思っていたのです。

ところで、実は中学生の頃、行動心理学のことを聞きかじったのをきっかけに広告の作成にも興味を持っていました。どうしたらテレビのCMの作成のような仕事につけるのかと考えたのですが、全くイメージがつかず、広告の道には進まなかったのですが、今振り返ってみると、いくらでもそちらに進む方法はあったなと思います。生まれ変わったら、広告をやりたいと思ってます。そんなわけで現職においても、大学のWebの企画や、学会のイベントの広告の仕事をよくやっています。

- 博士進学を決めるまで

大学院では、情報処理教育センターのネットワーク性能を予測するためにネットワークシミュレータを設計するという研究をしていました。ひたすらプログラムを書き、シミュ

レーションをする日々です。修士の2年生の頃、指導教員に強力に勧められて博士課程に行くことにしました。コンピュータに関する本をそれなりの数読んでいたこともあり、博士号をとって研究者となり、本を書く立場になるのは中々面白そうだぞと思ったからです。（今思えば、大学の教員にならずにインターネットビジネスのベンチャーを始めた方が良かったなとも思います。そういうチャンスはなんどかあったのですが・・・。）

指導教員から博士課程への進学を勧められたのは、研究者として期待をかけられたからだと思いますが、その理由の一つはプレゼンテーションが得意だったことが挙げられると思います。なぜ、プレゼンを得意にできたかというと、バンドでフロントマンをやったり、イベントの進行をしていた経験と中学生の頃からもっていたコピーライティングや広告に関する興味がうまくはまったからでしょう。情報をオーディエンスに効果的に伝えるにはどうすればよいのか、壇上でどう振る舞えばウケるのか、ということを考える習慣はプレゼンテーションの質を上げるのにとっても役に立つのです。それから、中学生の頃に興味を持ったレタリングや字体（フォント）に関する知識も、ビジュアルデザインをする上でとても役に立ちました。

指導教員に勧められて博士課程に進学したのだから、その後はそこそこうまくやっていけるだろうと思っていたのですが、認識の甘さを思い知らされました。というのも、私の指導教員はもともと画像処理の研究者であって、私が選んだ研究分野であるコンピュータネットワークの分野に関する知見や人脈が深いわけではなく、自分で道しるべを探しながら研究を進めるしかなかったからです。特に、最先端に関する嗅覚が効かなかったのが、今振り返ると大変でした。加えて、それまで本気になって英語を勉強していた訳ではなかったので、いざ英語で論文を書いたり、口頭発表する機会が巡ってきたときには苦劳しました。英語の口頭発表や招待講演、海外の研究者との仕事、1年3ヶ月ほどの米国での在外研究を経験していますが、未だに英語では苦劳しています。

なお、その後、何冊か企画を頂いて共著で本を書いたり、訳書を出版したりしましたが、自分の企画や単著での出版じゃないと本気度が足りないし満足感は得られないと思いました。何とか一冊、思いがこもった本を作りたいと思っています。

## - 大学教員として

博士課程の3年生の時、4月頃まったく進路に関して具体的に行動ができていなかった頃、そろそろ何かしないとマズいなあと思っていたら、指導教員の岡田先生に、静岡大学情報学部の助手（今で言う助教）公募の話を教えて頂きました。浜松かよ・・・（東京とか横浜じゃなく）と思いました。大学教員の仕事があるだけラッキーなんだから、沖縄でもどこでも公募があるなら出すのだ！と言われて、静岡大学に応募しました。就職活動と言えるのはそれだけです。幸い、10倍程度の倍率を突破して採用して頂くことができました。（大学教員の採用では、数十倍の倍率になることもザラですから、ラッキーでし

た。) 着任したのは情報学部と工学部がある浜松市。高校生の頃になろうとしていた電子楽器関連のエンジニアになっていたならば、ヤマハやローランドのある浜松に住むことになっていたと思うのですが、別の分野に進んだ結果、同じ街に住むことになりました。不思議なものです。

静岡大学では、当時情報処理学会のモバイルコンピューティング研究会を立ち上げたばかりの水野忠則先生が世話役になってくれまして、水野研の学生とともに研究を進めました。この頃、水野先生の元職場である三菱電機関連の方々、コンピュータネットワーク技術の国際標準化で水野先生が広げた様々な企業や大学の研究者と知り合うようになりました。ここでもようやくコンピュータネットワークの分野で活躍されている大学や企業の研究者とのコネクションが広がり、一気に研究の幅が広がりました。こういう機会を与えてくれた水野先生には深く感謝しています。

静岡大学情報学部での助手を2年半務めた後、助教授（今の准教授）の公募があった工学部に移り、今に至ります。途中、2度、米国カリフォルニア州での在外研究を行いました。家族も4ヶ月ほどロサンゼルスで暮らしました。アメリカの大学とは言え、仕事をしていた研究室で活動している人々でアメリカ国籍を持っているのは少数派。ボスの教授はイタリア人、同じ部屋にいたのは韓国人とレバノン人、他の部屋には中国人、カナダ人、メキシコ人、台湾人、インド系移民のアメリカ人。子どもたちが通っていた小学校、中学校も元の国籍は様々な人がいました。様々な英語の発音や考え方の違いに触れて、逞しくなりました。それから住んでいた家の近くにスケート場があったので、私は靴を買って毎週通ってスケートがうまくなりました。

## ■大学教員の仕事

最後に大学教員の仕事を紹介します。大学教員の仕事は大きく3つ、教育、研究、運営です。

教育には学部、大学院での講義、演習指導に加えて、研究室での卒業研究、大学院での研究指導、さらに学位の審査、入試問題の作成、採点、地域・一般向けの講座、教科書の執筆、教材の開発、留学生の受け入れ対応などもあります。

研究は、新しい技術の開発や真理の追究といったいわゆる研究そのものと、その成果の発表、つまり論文誌への論文出版、会議での口頭発表がコアになります。これらが一般の方がイメージする研究者のイメージだと思うのですが、この他にも研究に絡んで多くの仕事があります。まず、論文の査読です。研究者の仕事の成果は論文の出版で評価されるのですが、論文はただ書いたものが出版されるのではなく、他の複数の研究者による査読、つまりは論文の品質審査を経る必要があります。研究者は自分が論文を書くだけでなく、

他の研究者の論文を審査するのです。論文の査読は、論文誌だけでなく国際会議の投稿論文にもあります。人や分野にもよりますが、私の場合、平均すると毎週数本の査読をしていると思います。それから、論文誌や学会誌の編集作業、様々な学会イベント（国内外の研究発表会、討論会など）の企画・運営、研究資金獲得のための助成金の申請、そしてそれらの審査、企業との共同研究の打ち合わせなどの仕事があります。研究本体に多くの時間を割けるのは大学院生と若手の研究者であり、キャリアを積むと本体以外の仕事が自分の時間の大半を占めるようになっていきます。様々な仕事が一瞬落ち着いたときに、自分の研究そのものに手をつけられる瞬間が幸せなひとときです。

大学では、同じ研究分野の教員ばかり揃えるわけにはいかないので、同じ分野で仕事をする仲間たちは、全国、そして世界に散らばっています。学会などで久しぶりに同じ分野で切磋琢磨してきた研究仲間たちと会い、酒を酌み交わして語り合うのが何よりの楽しみです。

運営の仕事とは、大学を回していくための様々な業務のことを指します。例えば、大学の授業カリキュラムの編成、入試（学部だけではなく、大学院、外国人）の企画・運営、組織の再編（しょっちゅうあります）、就職指導や企業との対応、広報、海外の大学との交流、地域との連携、同窓会対応、大学構内の交通安全対策、大学の合併に関する交渉まで、実に様々な仕事があります。日本の大学は職員が不足していて、あまりにも多くのことを大学教員がしなくてはならず、教員が研究や教育にける時間が少なくなっているとよく言われますが、実際その通りです。しかし、私の在外研究先の米国の大学で、世界的に高名な大学教授が学内の交通管理の問題で頭を悩ませていたりするのを目にして、研究者にとっての自由が大きいとイメージされる米国であっても大学運営の問題からは離れられないのだという認識を強くしました。

## ■さいごに

私自身の話が面白いかドラマチックなのかは微妙ですが、人にはそれぞれ、その人にしかできない話があります。そしてそれは自分自身の興味を素直に伸ばし、そして本などで体験を広げることでより素晴らしいものになります。関高生の皆さんの素敵な「あなたの話」が生まれることを楽しみにしています。

